

## 理由表現としてのモノ構文

松 田 瑞 江

### 1. はじめに

モノの意味・用法は、辞書を見るまでもなく実質名詞から形式名詞、さらに助動詞、終助詞として幅広く、もしモノという語がなかったらたちまち言語生活に支障をきたす、基本かつ重要な語であることに疑いはないであろう。本稿で論じるのは、この働きの中でも専ら口語表現として使用され、いわゆる理由表現として用いられることの多い文末におかれるモノであり、文+モノ（モンを含む）で終わる形式をもつ構文を扱う。（以後モノ構文と呼ぶ）。

そもそも理由表現とはどのように捉えられ、位置付けられるものなのか。またモノ構文がほかの理由を表すカラなどと異なり、独特のニュアンスを含むのは何故なのか。こうした問いを解明していくことは、モノ構文の意義のみならず談話の論理としての日本語の志向性を明らかにする可能性が高いと思われる。

そこで本稿では、理由文の基底にある条件文の推論にかかわる「暗黙の前提」との関連から、従来モノ構文から伝わるニュアンスを一つの言語事実の効果としてとらえ直し、これまで認められてきた「自己正当化効果」のみならず、「自己言及の効果」の存在を提示し、さらにモノ構文に通底する効果は、後者の「自己言及の効果」であることを主張したい。

### 2. 先行研究

「モノ」の文法的な定義は日本語文法大辞典（2001）によると、形式名詞「もの」から転じた終助詞で、奈良時代以前には用いられたが平安時代以降は見られないといわれている。「天飛ぶや鳥にもがもや都まで送り申して飛び帰るもの（母能）〈空を飛ぶ鳥であるといいな。あなたを都までお送りして飛んで帰って来られるものを〉（万葉・八八〇）。用法に関しては、そうでない事態を想定しつつ、それが実現しなかったことへの残念さを詠嘆の思いをこめて述べるとする。議論の揺れているところでは、文末に使われることから終助詞としたが、逆接の意味で使われることから接続助詞とする説もあり、「ものを」「ものゆゑ」「ものから」など奈良・平安時代に多く使われた語はいずれも逆接の意味をもち、この「もの」がその意味を担ったと考える見方もあるとしている。

昭和20年代に助詞・助動詞を調査した国立国語研究所（1951）<sup>(1)</sup>によると、「モノ」は終助詞に分類され、不平・不満・うらみの意をこめ、理由を述べて反ばくし、訴え、あまえる気持。「だって」「でも」などと呼応することが多いとされている。

通時的な側面を論じた田辺（1997）は、文法化の観点から現代の「モノ」の用法である「…から」に当たる用法だけが残ったという理由で、江戸時代の「モノ」に現代の終助詞に通じる主観化の始まりを認める立場をとっている。

「モノ」が「カラ」と異なりニュアンスのある表現になる根拠を「一般性」にもとめた坪根（1996）は、用例（1）には「けんかなんかしたくないのが一般的だ」という意味が含まれていると考える。そしてその「一般性」を口にすることにより、自分の発言・立場を正当化しているのだとする。用例（2）は「休みだって知らなかったら、学校へ来るのが一般的だ」という意識が含まれ、自分が間違っただけであることを正当化している感じがうかがえるため「から」を使うのに比べて「仕方がないでしょう？」という気持ちがこの文に現れているのだと説明する。

（1）私はすぐあやまるわ。けんかなんかしたくないもの。

（2）なぜきのう学校へ来たの？

休みだってしらなかったもの。

先行研究では以上のように、モノ構文は歴史的には形式名詞から転じた終助詞とされ、その用法は理由表現として捉えられており、その理由の述べ方に付随して話者の「不平・不満・うらみ」などや甘えの気持ちが伝わることを際立った特徴としてあげている。

本稿で論点におく、この理由の述べ方に付随するニュアンスがどこから生まれるのかを分析した坪根（同）は、「一般性」から「正当化」をすることによる「仕方ない」という気持ちを生むとしているが、この考察は助動詞「モノダ」のモダリティ用法の「本質・傾向」や「当意」<sup>(2)</sup>などに通じ、意味の連続性に依拠しており、現代のモダリティ論議内にとどまるものである（吾妻：1990・1997、北村：2001）。

本稿では、モダリティ的な意味を担った「一般性」とは別の観点、すなわち話者の内部で行われている推論を手掛かりに、日常言語の条件文とそれを成り立たせている「暗黙の前提」との関連において考察する。

### 3. 理由文と条件文

理由文の基底には条件文の存在があるといわれている（坂原：1985）。このことは理由表現の一つであるモノ構文の性格を明らかにする上で重要なアプローチになると考えられる。例えば信じられないことが起き、それが夢でないことを確かめる際に（3）のような推論が行われるとしよう。

(3) もし頬をつねっても目覚めないならば、これは本当に起きたことだ。

頬をつねっても目覚めない。ということは、  
これは本当に起きたことだ。

前提となっている条件文を言わずに「頬をつねっても目覚めない。ということは、これは本当に起きたことだ。」を、カラを用いた理由節を含む複文に置き換えたのが(4)である。さらに(4)を倒置すると(5)のモノ構文が得られる。

(4) 頬をつねっても目覚めないカラ、これは本当に起きたことだ。

(5) これは本当に起きたことだ。頬をつねっても目覚めないモノ。

条件文研究には大きく二つの観点があるといわれている(有田：1993)。一つは事実をどう捉えるかという観点で「假定」を「事実」の単なる対立概念ととらえただけではなく、確定条件とも言われる理由文の存在を認めただけで、事実性との関連付けを問題にするものである。

もう一つは、条件文の前件と後件がどのような関連性を持つかという観点で、一般／個別、必然／偶然など、四つの形式の意味に対応させる試みで、条件文と理由文・譲歩文との共通性を取りあげることも可能になる。実際に、国語学では順接假定条件における恒常条件、必然確定条件はそれぞれ「恒常条件は、ある条件が成立する際にいつでも以下の帰結句の事態が成立するという、恒常的・普遍的性格をもったものとして提示するもの」であり、「必然確定条件は、条件句が原因・理由を表し、条件句と帰結句とが必然的な因果関係で結びつくもの」であると説明されている(小林：1996)。

上記のように理由文の考察に順接假定条件における恒常条件、必然確定条件の存在も見逃せないが、本稿では日常言語の条件文における「暗黙の前提」との関連において考察するため、次章で「暗黙の前提」とはどのようなものなのか、それとモノ構文との関わりはどのようなになっているのかについて論じる。

#### 4. 暗黙の前提について

坂原(1985)は日常言語の条件文“ $p$ ならば $q$ ”の発話の特徴として、明言された命題は明示されない前提に支えられていると主張している。「明示されない前提」すなわち「暗黙の前提」は、発話者の志向する一つの特殊世界(「言及世界」と称される)を構成する。

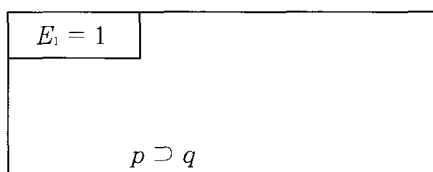
(6) 沸騰しているお湯に手を入れれば、やけどする。

(6)が、普通真であること(真であると感じられること)には、既に「普通」という制限が付き、「普通」と名付けられる特殊世界の限定が必要とされている。つまり「高性能の断熱材で

できた手袋をしている」や「気圧が異常に低く、沸騰していても40℃ぐらいである」といった「特別な事態」はあらかじめ除外されている。話者が明示せずに前提しているこのような補助的条件（補助的仮定）が「暗黙の前提」である。日常言語では通常、中心的話題に焦点があてられ、補助的条件すなわち「暗黙の前提」は一挙に与えられたものとして明示されることなく会話が進む。

「暗黙の前提」に支えられた条件文“ $p$ ならば $q$ ”の言及世界のモデル化にあたり、まず演繹定理<sup>(3)</sup>から、 $q$ の十分条件を構成する命題の集合を $E_0$ とし、さらに、 $E_0$ から $p$ を除いた集合を $E_1$ とすると、 $E_1$ は、条件文“ $p$ ならば $q$ ”の発話において、既に成立するとみなされる命題の集合を考える。(6)の文は、話者が明示せずに、前提 $E_1$ が真である世界、すなわち $E_1 = 1$ である世界についての断定と扱われ次のように図式化される。

(7) 条件文“ $p$ ならば $q$ ”の言及世界



理由文の基底にある条件文の「暗黙の前提」という性質を理由文も受け継ぐ。会話参加者が同じ言及世界を構築するからこそ成り立つコミュニケーションの場において、聴者側に「暗黙の前提」のなにぶんかが伝わっていると考えられる。むしろ日常会話では明示されない言い分を考慮しながら行われるのが自然と言ってもいいだろう。話者にとり常に真である命題は、言語的意味が $p \supset q$ であったとしても、 $E_1$ を前提としているためにそれ以上のものを伝えるのである。

モノ構文の理由文の特殊性はこの暗黙の前提必要としないか、排除する点にあるのではないかと考えられる。それは、話者の信念の中で一番真っ当だと信じられる命題であり、他の前提は無用である。そのことは時として、理由を述べるからにはそれ相応のものを期待している聴者にとっては、意外なものである場合もあるだろう。いうなれば、このコミュニケーションの場における話者と聴者との言及世界のアンバランスがモノ構文の特殊効果を生み出しているのだと考えられるのである。

条件文から引き継がれた前提並びに言及世界と言明の関係で考察すれば、ことさら「一般性」を持ち出す必要もなくなる。言明が他の前提を必要としないぐらい強いものであるとした上で、さらにモノ構文がもつ効果について言及する。

## 5. モノ構文の言語効果

本稿では、モノ構文が使われることによって生まれるニュアンスを言語事実としてとらえ直し、

用語も「…効果」を用いる。また話し言葉であるということで、基本的には話し手は「私」、場面は「今」「ここ」である制約がともなう。したがって、使用する用例がテキスト形式であっても、上記のような言語環境の中で行われていることを想定し、専ら話し言葉に用いられるモノ構文という言語現象の動的な働きに注目したい。

モノ構文の働きは強く主張される効果をもつ理由表現に限定されるものなのであろうか。また話し手も子供や女性に限定されるのであろうか。モノ構文にはこれまで認められていた効果の他に、もう一つ重要な効果があると提案したい。従来あまり顧みられることのなかったその言語効果を検証することによって、これまで漠然とニュアンスのある話し言葉としてとらえられてきたモノ構文のより詳細な分析を行うことが可能になると考えられる。

## I 自己正当化効果

従来の先行研究で指摘されてきた理由の述べ方に付随する話者の「不平・不満・うらみ」などや甘えの気持ち、また自分が信じて言うのであるから、絶対だという正当化をゆずろうとしない態度が前面に出た効果である。

## II 自己言及の効果

### (9) [主人公の彬彦（30代後半）と妹みつとの会話]

みつ： どれぐらい上海にいるつもりなの

彬彦： 八月のはじめには帰るつもりだよ。八月七日はサトの七回忌だもの

(辻原：20)

Iの効果との違いは、妻サトの忌日には帰国するのが当然という気持ちをもっているにもかかわらず、ことさら強調し正当化するのではなく、どちらかといえば独り言のように自分自身に言い聞かせるような効果をもつものである。この効果についての考察はこれまで余り行われてなかったようである。その要因として、一つには(10)のように置き換えが難しいこと。これまでモノ構文が女性や子供に特有の話し言葉として捉えられてきた経緯があること。元來話し言葉であるため当然、語気・口調など発話の実態などが考慮されなければならないが、その記述が容易でないことなどがあげられる。結果的に、Iの効果の方が目立ってしまったため、こちらのつづやきは黙殺されてしまった恐れがある。

### (10) \*八月七日はサトの七回忌だものだ

(\*不自然と思われる文。以下同様。)

## 6. 効果はどこから来るのか

接続助詞カラを用いた文は、例文（4）でみたように理由表現として、モノ構文と非常に近い働きがある。但しその用法には、下記にあげているように①事象・内容レベル、②認知レベル、③発話行為の前提レベルがあり、働きは多様である（松田：2005）。

- ①' 雨が降ったカラ 地面が濡れている
- ②' 地面が濡れているカラ 雨が降ったのだ
- ③' お母さん 魔法瓶にお茶いれとききましたカラ

モノ構文とカラ節を用いた文との相違点は、モノ構文には③発話行為の前提レベルの用法が無いことである。なぜなら、聞き手への働きかけである③のベクトルとは全く逆の話し手自身への働きかけにあたるのが「自己言及的效果」のベクトルだからである。

- ③" \*お母さん 魔法瓶にお茶いれとききましたモノ

③" の用例が不自然に感じられるのは相手向きではなく「自己言及的效果」の特徴である自分向きのベクトルが働いていることによるものだと思われる。モノ構文での話者の推論が個人的且つ、強い信念に支えられていることから、自分自身に話しかけるⅡの効果の働く場においては常に自己完結していると考えられる。

Ⅰの自己正当化効果との関係について言及すると、結果的に話者自身の信念で固まった世界を他者（聴者）に訴えることになり、発話の場面によっては、二次的な効果として不平や不満の感情の付加あるいは甘えなどを表出されたと受け止められるのではないだろうか。

- (11) マネジャーにメモが渡され、それを読む。

「残念ですが、洲本から関空、津名から天保山、神戸中央突堤、泉佐野、それから岩屋ー明石間のたこフェリー、高速船もすべて欠航だそうです。ただ朝四時に、津名から中央突堤へは、一便だけ出たそうでございますが」

「当たり前だ。地震の前だもの」

と客のひとりがいった。

（辻原：417-418）

資料（11）のテキストが文字情報だけなのではっきりしたことは言えないが、この客はことさら不満などを強調するのではなく、自分の推論の正しさを独り言のように呟いた可能性もある。しかしその信念は揺るぎのないものであり自己完結している。次の用例は完全に独白の形をとっている。

- (12) 隣室で、女の子が悲しそうに泣いている。（略）かわいそうに。でもわたしも苦しい

のよ。だって船に乗るのも、海も、江西の娘たちと同じようにはじめてなんですもの。  
でも、こうして彼にみつからないために閉じこもっているには、船酔いは好都合だったかもしれない。(略) こんなことは何でもない。わたしは何日だって平気よ。<sup>ヤオトシ</sup>蓄<sup>ヤオトシ</sup>洞  
に一ヵ月近く、飲まず食わずで隠れていたし、闇工場の厳しい作業にも、<sup>ラオカイ</sup>労改<sup>ラオカイ</sup>の独房  
にも耐えたのですもの。(辻原：345-346)

自己の中で完結した信念の強さがあればモノ構文が成立する。次の例文は理由を尋ねられた答えであるがモノ構文が作れない。

(13) [雑誌のインタビュー記事の中の会話]

彼女(インタビューを受けている)は就職にあぶれた理由を尋ねられ、担当教授に意地悪をされたのだと言って笑わせた。

彼女：きっと、バレンタインデーにチョコレートあげなかったからよ  
そのころは日本の経済がとても良かったのにと、インタビューの女流作家に言い返され、職を選んだ結果だと本音をもらした。(矢作：365)

(14) \* きっと、バレンタインデーにチョコレートあげなかったもの (よ)

「きっと」という副詞とは明らかにそぐわない。前提となっている世界は完全に自己完結していなければならないという強い制約がモノ構文にあるためと考えられる。これは、「<sup>(4)</sup>だろう」に付加できないこととも関連があるかもしれない。

(15) コーヒーを一口飲んでから、少女は笑った。

「そうかしんない。— 何でそんなこと言うの」

(主人公・彼)「あんな時間にビールなんか飲んでたからね」

「だってあれは普通の日じゃなかったもん。一生に一回みたい最低なときだから」

(矢作：504)

モノとカラが両方現われている。自分自身にとって「普通の日でなかった」ことが言い切れる信念の強さがあればモノ構文は成立する。自己言及的效果と自己正当化効果とは共存しても不都合はない。基本的にモノ構文は自己言及的であることが先行すると考えられるのである。

## 7. ま と め

「自己言及的」とは、話者は自分自身との語りにおいて完結している世界であり、時には他の前提の存在を全く許さない完全に自己の信念で作り上げられた言及世界を構成していることを意味する。それはたまたま多数者も賛同する「一般性」と重なることもあるが、自己完結の言及世

界においては常に話者の信念が優先される。このとき聴者に伝わるニュアンスは言語効果としては二次的なものであり、話し手の思惑の外で起こることである。このことからモノ構文に通底するのは「自己正当化効果」ではなく「自己言及的效果」であると結論付ける。当然のことながら言語生活には社会的な面もあるため、その効果を避けたり利用したりするのは話者の選択にゆだねられていることは言うまでもない。

今回はテキストが文字資料に頼っていたため、「自己言及的效果」について確認し難い面があった。機会があれば音声資料を活用したいと考えている。ただ、モノ構文をとらえるのに、実質名詞から形式名詞に至る連続的な意味役割はひとまずにおいて、条件文の推論という観点から捉え直すことによって、その推論の特殊さと言語効果が結びついていることを解明できたのが収穫であった。それによって、談話の論理において日本語の志向性の一端を示すことができたと思う。

## 8. 今後の課題

今回はモノ構文に限っての分析であったが、文末におかれるモノヲとの関わりもモノ構文の歴史の変遷を考えると興味深いものがある。モノヲは一般に、形式名詞モノに間投助詞ヲが接続してできた接続助詞とされている。しかし、江戸後期から近代において、モノヲとモノが併用されているテキスト多く見出されるようになる。そもそも逆接を表していたモノヲが順接を獲得し、さらに文末での終助詞的なモノヲがあまり使われなくなってしまった現在、文末のモノが使われる場面や文脈を拡張しているのではないかと思われる。その反面で失われてしまった意味合いもあるのではないかと推察する。

理由表現もそうした変遷のダイナミズムの中で、カラやノデのように、順接専用の接続助詞の定着は日本語が情緒的な結合を廃し、次第に論理的・分析的に変貌していったととらえる見方(吉井：1977)もある一方、文末のモノに話者が捨てきれないものが込められているのではなかろうか。多様な角度から理由表現の解明を行うことを今後の課題としたい。

### 注

- (1) 1949年(昭24)4月から、1950年(昭25)3月までの新聞・雑誌から、助詞・助動詞の使用例、おおよそ48,000を採集しこれには会話文からの用例も大量に含むとされている。
- (2) 「本質・傾向」や「当意」の用法名は日本語記述文法研究会編(2003)に準じた。  
人間はみな寂しいものだ。(本質・傾向)。遅れそうなときは、まず連絡を入れるもんだ。(当意)(同：218)
- (3) 論理式の集合  $E$  と論理式  $p$  から論理式  $q$  が導出できるなら、 $E$  だけから  $p \supset q$  が導出でき、かつ逆に、 $E$  から  $p \supset q$  が導出できるなら、 $E$  と  $p$  より  $q$  が導出できるとする ( $E, p \vdash q \Leftrightarrow E \vdash p \supset q$ ) (坂原：1985)。
- (4) \*だって、もう会えないだろうもん。(日本語記述文法研究会編：2003)



## 参考文献

- 吾妻祐樹（1990）「形式的用法の「もの」の構文と意味－〈解説〉の「ものだ」の場合－」『国語学研究』29, 82-94
- （1997）「『ものだ』文の表現構造－『形式』『実質』峻別への疑問－」『日本語の歴史地理構造』明治書院
- 有田節子（1993）「日本語条件文研究の変遷」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版
- 北村雅則（2001）「モノダで終わる文－連体修飾部の時間的限定性からの考察－」『国語国文学』88-7, 30-42
- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞』
- 小林賢次（1996）『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- 坂原 茂（1985）『日常語の推論』東京大学出版会
- 田辺和子（1997）「形式名詞『モノ』における文法化としての文脈化と主観化」『日本女子大学紀要文学部』47
- 坪根由香里（1996）「終助詞・接続助詞としての「もの」の意味－「もの」「ものなら」「ものの」「ものを」『日本語教育』91-12, 37-48
- 日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 松田瑞江（2005）「日本語らしさについて－接続助詞『カラ』節の多様な働き－」早稲田大学文学研究科修士論文
- 山口明穂（1967）「接続助詞 ものから・ものゆゑ・ものの〈古典語〉・ものを〈古典語・現代語〉」『國文学 解釈と教材の研究』12-2, 學燈社
- 吉井量人（1977）「近代東京語因果関係表現の通時的考察－『から』と『ので』を中心として－」『國語学』100-9, 武蔵野書院

## 辞典

- 山口明穂 他編（2001）『日本語文法大辞典』明治書院

## 資料

- 辻原 登（2007）『ジャスミン』文藝春秋
- 矢作俊彦（2006）『ららら科学の子』文藝春秋